

# ESDの視点を取り入れた小学校家庭科の題材開発

森下 友紀 鈴木 明子 由井 義通 樽本 和子

## 1. はじめに<sup>1)</sup>

政治、経済の不安定さ、深刻化する環境問題など、様々な分野において世界的で複雑な問題が発生している。このような世界規模で進行する諸問題に対し、解決策や社会のあり方についての方向性を示したのが、「持続可能な社会」ということができる。

「持続可能な社会」の実現に向けて重要となるのは「教育」である。学校教育、地域での教育、社会教育など、教育の果たす役割は大きい。DESD（持続可能な開発のための教育の10年）では、すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことを目指している。

「生活の質的向上」や「主体的生活者の育成」といった家庭科の目標や体験的・実践的活動や問題解決的な学習を重視する家庭科の学びは、ESDとの親和性がある。さらには、従来の家庭科学習内容にESDの視点を加味することで、家庭科学習において指摘されている指導上の課題にも応えることができると考えている。

これまで、このようなESDの視点を取り入れた小学校家庭科における実践的な報告もある。しかしながら、このような実践的な研究は途についたばかりであり、学校におけるESDの推進に向けて、更なる研究の蓄積が必要である。本研究では、ESDの基本的考え方、ESDが大切にしている学びの方法などから、従来の家庭科学習の改善点を見出していきたい。そして、小学校家庭科での食生活の学習について、他教科、総合的な学習の時間との関連をはかりながらESDの視点を取り入れた授業改善、授業構想、実践を行い成果を検証していくことを目的とした。

## 2. 小学校家庭科の食生活に関する授業づくりの課題

野菜嫌いの児童に、給食指導において「少しずついいから、野菜を食べられるようになる」といいます

ね。」と声をかけると、「僕は、毎日野菜ジュースを飲んでいるから大丈夫です。緑の栄養、きちんと取れていますよ。」と答えた。現代においては、たくさんの食べ物があるが、食が豊かかと言えば、決してそうではないことが指摘されている。食に対して興味もなければ、食べ物が何でできているかもわからず、また、わからなくても困らない世の中である。

こうした中で、家庭科はどのように食生活を扱っていけばよいのだろうか。ESDの視点を取り入れることで、現代的食生活の課題に応えることはできないだろうか。

家庭科は学校教育において、食に関する学習の中核を担っている。調理実習などを中心とした食に関する学習では、子どもたちの学習意欲も大変高い。小学校家庭科のこのような知識や技能の習得は、教科の目標達成のために必要であるが、しかし、それだけでは、真の意味で持続可能で豊かな食生活をつくり出す力が身に付いたとは言えないのではないかと感じている。食文化・伝統としての価値を感じたり、味を楽しんだり、食べ物を大切に感じたりするなど、授業において食生活の価値認識の変容をもたらすことこそが、家庭科の目標である生活実践へ向かう力に直接的につながっていくのではないだろうか。

武藤は、「学校の食物学習では食物の生理的機能、つまり我々の生命の源であり、健康を保持するための栄養の充足、食品バランスのよい献立作成、そして調理技術を重視している。しかし、我々の生活にあたっては、食物は飢えをみたし、病気にならないためだけでなく、社会的・文化的役割も大きく、これらのあり方を教材にする重要性が挙げられる。」と述べている<sup>2)</sup>。そして、「ヒト、モノ、コト」を学習対象としている家庭科の授業について「食べるという営みは、実用だけでなく、また、知識を必要とするだけではなく、食生活の構造を理解し、それを動かす原理をとらえなければ、その営みは機能しないのである。食物の授業が“人間”“生活”という視座を持ち、実用や知

識だけでなくその原理をとらえるためには価値体系の導入が必要となるのではないだろうか。食に対する文化、歴史、個人の好みなど、食物観や快適性などをとらえなければ食生活の構造には迫れない。しかし、これらのコトは自然科学の標榜する客観性から逸脱しやすい価値観を対象とするものであり、どのような内容を包括するか論議中である。」と述べている<sup>3)</sup>。

小学校学習指導要領家庭科編では、食生活の伝統や文化に関する内容を発展的に学ぶ内容としてしか取り上げていない。その理由は、小学校家庭科での学習対象を、自分の家族を中心とする周辺地域や身近な環境への関わりにとどめ、中学校との住み分けを意図しているためである。また、教科における授業が背景学問を基盤として展開されるために、食生活の授業も、自然科学的なアプローチがしにくい内容については、小学校の内容として重視されてこなかった<sup>4)</sup>。

平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」では、次のように示されている<sup>5)</sup>。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。

このように、小学校家庭科でも知識や技能の習得のみに重点をおくのではなく、食生活文化を継承し未来に発展させる資質・能力が育まれるよう多様な価値観を吟味しながら食生活の営みを愛しみ耕す未来志向的な視点をもつ実践的・体験的な学びが求められると考えた<sup>6)</sup>。このような学び方は、ESDの学びと共通している点が多い。家庭科の学習に多様な生活の価値観の構築という視点を取り入れることによって、家庭科とESD両者の学びの充実を期待できると考えた。

### 3. ESDの視点を取り入れた家庭科授業改善

2002年の国連総会において、我が国の提案により、2005年から2014年までの10年間を「国連持続可能な発展のための教育の10年」とすることが決議され、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）がその推進機関に指名された。これを受けてわが国では、日本ユネスコ国内委員会や関係省庁が協力し、ESDの推進のため取り組んできた<sup>7)</sup>。文部科学省では、ユネスコスクール

をESDの推進拠点に位置づけており、本校もユネスコスクール参加校である。

日本ユネスコ国内委員会は、ESD実施には、次の二つの観点が必要であるとしている。

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと

そして、そのためには、「環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別の分野にとどまらず、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要」であると述べている。

家庭科教育でも、小学校学習指導要領解説家庭科編において、内容に「D身近な消費生活と環境」を示し、それを衣食住の学習である「B日常の食事と調理の基礎」や「C快適な衣服と住まい」と関連させて具体的に学習することを、各内容の指導や題材構成の配慮事項として示している。また、新学習指導要領の家庭科改訂の要点にも、「主体的に生きる消費者をはぐくむ視点の重視」として、「持続可能な社会の構築など社会の変化に対応して、主体的に生きる消費者としての態度を育成する視点から、内容「D身近な消費生活と環境」を設定した。」と明記されている。このように家庭科教育では、環境教育が先行するかたちでESDの理念が浸透してきたと言える。しかし、上記のようにESDの理念を鑑みると環境教育にとどまらず、経済、社会、文化の各側面からの学際的、総合的なアプローチも求められている。家庭科学習においても、ESD＝環境教育という捉え方ではなく、持続可能な社会を実現するための多様な側面を考え、題材のねらいを設定するべきであると考えられる。

日本ユネスコ国内委員会が示しているESDの目標の3つの目標の1つに、「環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと」とある。ESDで求める「行動・参加」にあたる「生活実践、実践的・体験的活動」は家庭科の学習方法の特質であり、重視されてきたところである。

それでは、価値観についてはどうだろうか。ユネスコは、個人の意思決定に関わる価値観こそESDにおいて重要であると指摘している。その一方で、価値観とは何かについては、議論の途上にあるという指摘もある<sup>8)</sup>。ESDで求められている価値観とは持続可能な発展のために求められる価値観である。ただ単に「エコ」や「省エネ」のために何が求められるかといった狭義

での知識や技能だけではなく、それらの実践を支える価値観、すなわち、自然環境とのつながりを尊重できる価値観、地球規模で考える価値観、未来志向性を育む必要があるのではないだろうか。小学校家庭科においても、持続可能な社会の基盤となる個々の生活に価値を見出し、その価値を社会とのつながりの中で再構築していく視点を取り入れていくことが必要となる。このように、実践を支える価値観の質的な向上をESDは示唆しているのではないか。

一方、日本ユネスコ国内委員会は、ESDの学び方・教え方として次のように示している<sup>9)</sup>。

- 「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置づけること
- 単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチとすること
- 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

これらは、家庭科が従来から大切にしてきた、問題解決的な題材構成、実践的・体験的な学び、自分の生活に主体的に関わることを重視した学び、他教科との関連を図ることの重視、ストーリー性のある学びなどと重複する点が多く、ESDの学び方を取り入れていくことはこれまでの家庭科の学びを一層充実させていくことであると考えられる。

以上のように、家庭科で大切にしてきた学び方をさらに充実させながら、「持続可能な社会を創り出すための価値観」を育む未来志向的視点を題材に加味しつつ、身近な生活における実践に価値を見出し大切にす的心情を育む授業づくりをしたいと考えた。さらには、他教科、総合的な学習の時間との連携、外部講師や地域の施設などの多様な教育資源の活用など、学びのプロセスを重視した授業づくりを行っていく。

題材については、環境教育に直接的に結びつく題材ではなく、小学校家庭科の炊飯を研究対象題材とし、ESDの視点を取り入れて授業構成をしていく。

なお、ユネスコのプロジェクトとしてユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施するライスプロジェクトがある。これは、アジアの主食であり人々の生活に深く関連するライス(米)をテーマ・教材とする学びを通じて、国を越えたネットワークを作っていくことをねらいとし、研修会等を通して様々な実践を交流したり検討したりしている。本研究にあたってはライスプロジェクトから様々な示唆を得ることができた。

#### 4. 授業実践

米についての体験的な学習は総合的な学習の時間に位置付けられることが多いが、各教科においても関連した学習を行っている。家庭科では、第5,6学年の2年間で継続的に取り組み、総合的な学習との関連を図りながら、体験から理解へ、理解から体験へという学びに続いて体験から行動へ、行動から発信へという枠組みの中で学習を計画した。5年生では、主に米に関する基礎的・基本的な知識や技能を体験的に学んだり、地域とのつながりをもちながら学んだりする。日本人らしい価値観である米を生産する農家の方や自然への感謝の心も、持続可能な社会の構築には不可欠な価値観であり、そのために農家の方と主体的に交流できるようにする。それをもとに6年生では米を中心とした食文化を尊重する態度を養い、これからの食生活に関して自分なりの考えを発信していく学習活動を行った。

5年生での取り組みと、日本の食文化を支えてきた米飯とこれからの食生活のあり方についての6年生での実践について報告する。

##### (1) 5年生での取り組み

5年生では総合的な学習と関連を図りながら、次のようなねらいをもって、年間を通して米に関する学習を計画した。

- ①米の生産の仕組みについて、広島市安佐南区吉山農事組合の協力を得て田植えや稲刈りの体験学習をする。また、農事組合の活動から、日本の農業の新しい試みや工夫について農家からの聞き取りや農事組合の方々から話を聞くフィールドワーク学習を組み込み、稲作の現状を理解する。学校では、バケツ稲を通して、稲の発育の様子を観察する。
- ②農家の方々との関わりを通して、日本人らしい価値

<年間のスケジュール>

5月	田植え事前学習(講師 JA職員) 広島市安佐南区吉山にて田植え体験(講師 農業法人よしやまの方) バケツ稲の観察開始
6, 7, 8月	バケツ稲の生長観察
9月	かかし作り
10月	広島市安佐南区吉山にて稲かり, 脱穀, 精米体験 プロの調理師による食育指導(おいしいお米の炊き方)
11月	家庭科「おいしいご飯を炊こう」

観である米を生産する農家の方やその地域、自然への感謝の心をもちながら、おいしく残さずいただく態度を育てる。

③イネの生産を取り巻く自然環境の理解のために、田植え学習の実習地の周辺にある里山において環境学習をする。

④「おいしいお米の炊き方」の家庭科の授業において、料理専門学校の講師による米をおいしく炊くこと、いただくこと、生産者である農家の方々に感謝して食事をとることを学習する。



写真1 稲刈りの様子



写真2 プロの調理師による食育指導

## (2) 6年生での取り組み

①題材名 「ごはんのおいしさ、再発見！」

②題材について

ESDが「文化的視点」を重視する場合、単に文化を理解の対象にとどめるものではない。文化を固定的靜的に捉えるものではなく、現代の問題状況を見据え、過去に学び未来を思考するというように、文化を動的なものとして、多面的、総合的にとらえつつ、その文

化を創造する主体としての人間作りへの働きかけが重要であるとしている<sup>10)</sup>。

そこで、最も日常的に食べられている米を題材として、そのおいしさや日本の食文化の中心としての米の価値を見出し、それらを尊重する態度を養い、これからの食生活を工夫しようとする実践的な態度を育てることを目標とした。

食事の役割とは、食欲をみだし、健康維持・成長のための栄養を摂取するという生理的機能を果たす場というだけではなく、例えば、食事におけるマナーや調理の技術や道具、おいしく食べるための様々な工夫は、より豊かな食事を求めて築き上げられた食文化の一端であり、そのような文化的意味をも含めた形で応えなければならない。児童を取り巻く食生活の課題などについて考えるとき、食事は、家族の団らんといった会食の場であり、味覚を満足させ、伝統的行事や季節を楽しむためのものであるというとらえ方は、生涯にわたって真の意味で豊かな食生活を創り出していくために必要不可欠であろう。このように生活を文化的な価値認識をもってとらえることを学習することで、調理の技能の習得や栄養的な知識の獲得へと向かう意欲が喚起され、生活実践への原動力となると考えた。

ただ単に、ごはんのおいしさを味わおうと投げかけても誘導的な指導となってしまふであろう。題材として、我が国と同じように米飯を中心としたタイの食文化を取り上げたり、タイ米を食べたりして、世界の食文化にも関心をもったり、同様に現代と古代を比較したりすることで、改めて日本の食文化の発展や日本の米飯のよさを認識できるだろうと考えた。ここで留意したいことは、1993年の「タイ米騒動」の際、のタイ米の本来のおいしさを知ることがなかったために、タイ米はまずいという否定的な考えが生まれてしまったように、他国の食文化を卑下したり自国の食文化の方が優れているという誤った価値認識をもたせたりしないようにすることである。どちらも米を主食とした食文化であり、理解、尊重することの大切さも伝えたい。

小学校学習指導要領解説家庭科編における、食事の文化的意味に関する記述は、「米飯やみそ汁が我が国の伝統的な日常食であることにも触れること」「『配膳』については、食器の位置に配慮し、例えば、米飯及びみそ汁、はしなどを配膳する際には、我が国の伝統的な配膳の仕方があることが分かるようにする」とどまっている。中学校では、生活の視点を家庭から社会へと広げていくことを重視し、内容項目として、「B食生活と自立(3)日常食の調理と地域の食文化」として挙げられており、「地域の食材を生かすなどの調理を通して、地域の食文化について理解すること」と

ある。6年生の食生活に関する学びのまとめとして、生活の視点を自分の家庭から社会へも向け、中学校での学習につなげていくことも考慮していきたい。

### ③題材の構成

学習指導要領において、ごはんのみそ汁は、唯一指定題材として示されている。これまで、家庭科の学習において、なべによる炊飯を通して、米がどのようにごはんになるのか、その科学性を追究しつつ、日常的に食べている我が国の伝統食としての米飯に関心をもたせる学習を行ってきた。しかし、米飯は児童にとってあまりに日常的な食材であるため、積極的にそのおいしさや文化的な価値に気づいたりすることは少ないであろう。

例えば、日本のように箸だけで食事をする食文化は少ない。それは、ごはんの粘りが強いためであり、茶碗をもって食べることがマナーであるから、箸だけで食べることができるのである。他国の米は、日本のものよりも粘り気が少なく、さらには茶碗をもって食べることをよしとしない食文化の中では、箸でごはんをこぼさずに食べることは不可能であり、スプーンなども使って食べることになる。学習によって日本のごはんの特徴、マナー、食べるための道具に関する認識が結びついて習慣化され、そのような伝統的な食べ方に価値を見いだすことになると考えている。

#### 第1次 「お米、食べてる？」【課題設定場面】

最初に、「米」という文字を真ん中においたイメージマップを作成させ、それらを交流する。これまでの家庭科での炊飯の学習や社会科や総合学習での米の学習、自分自身の経験から得られた言葉が挙げられるであろう。同時に、これまで米に関してたくさんの学習をしてきたことに気付くはずである。米の消費を呼びかける広告や資料を提示し、我が国としてごはんを中心とした食生活を大切にしてきた経緯を確認する。

次に、一方で、学校給食における残食率調べの資料から米がたくさん残されている現状を知る。また、日本全体の資料を示し、米の消費量が1960年代と比較して半分となっていることを知る。生活者としての視点をもたせながら、資料の傾向について理由を予想したり、日本人は将来、米をもっと食べなくなっていくだろうかと投げかけたりする。農業や食料自給率の問題としてではなく、毎日ごはんを食べている生活者として、これからもっとごはんを食べていくべきなのか、それともこのような傾向は時代の流れとして受け入れるべきかなど、自分なりの意見をもたせ、話し合う活動を行う。それについて、学習を通して検証していくと投げかける。

#### 第2次 「いろいろなお米を食べてみよう」【情報の取

集、分析（実践的・体験的学習、調べ学習）】

4種類の実践的・体験的活動を行う。①今と昔の米の食べ比べ（焼く、ゆでる、炊く調理の違い、品種の違い、調理道具の発達を知る）、②タイ米と国産米の食べ比べ（ゆでる、炊く調理の違い、品種の違い、献立の違い、食事のマナーの違いを知る）、③伝統的米料理であるちらし寿司の調理実習（基礎的・基本的技能を活用する、伝統食に込められた知恵や願いを知る、料理の美しさを工夫する）④現代的な米の食べ方調べ（米粉の利用について知る）

実践的・体験的活動を通して、様々な角度から米の文化についてとらえさせるプロセスを通して、食生活への価値観を再構築していく。さらに、第1次でかいたイメージマップに言葉を書き加えながら、米を中心とした自分の食生活に関する視野が広がっていくことを実感できるようにする。

#### 第3次 「子どものためのごはんメニューを提案しよう」【課題解決場面】

毎日ごはんを食べている生活者として、これからもっとごはんを食べていくべきなのか改めて問う。そして、自分なりの考えをもって提案したい献立を考える。献立を立てるための基礎的・基本的な知識として、食品を組み合わせるいろいろな料理ができることに気付き、バランスよく食品を組み合わせるおかずとなる料理を考え、3つの食品グループのそろった具体的な1食分の献立を考えることができるようにする。最後に、できた献立を説明し、提案する。そして評価活動を行う。

#### ④指導目標と指導計画

<指導目標>

○日本の伝統的な日常食である米飯に関心を持ち、食事の役割を総合的に考えて食生活を大切にしようとする。【家庭生活への関心・意欲・態度】

○食生活への多様な価値意識をもちながら、栄養のバランスや食品の組み合わせを考えた米飯を中心とした1食分の献立を考えたり、自分なりに工夫したりする。【生活を創意工夫する能力】

○これまでに学習した調理の基礎的・基本的な技能を活用し、米や野菜などを用いて簡単な調理ができる。

【生活の技能】

○米飯は、昔から現代にかけて食べられていることや、様々な国で主食として食べられており、食文化・伝統と深く関わりがあることがわかる。【家庭生活についての知識・理解】

○栄養のバランスや食品の組み合わせを考えた1食分の献立の立て方について理解する。【家庭生活についての知識・理解】

<指導計画（全10時間）>

第1次 お米，食べてる？（1時間）

第2次 いろいろなお米を食べてみよう（5時間）

第3次 子どものためのごはんメニューを提案しよう  
（4時間）

5. 成果と課題

本研究では，家庭科で大切にしてきた学び方をさらに充実させながら，「持続可能な社会を創り出すための価値観」を育む未来志向的視点を題材に加味しつつ，身近な生活における実践に価値を見出し大切にする心

④題材の評価規準

家庭生活への 関心・意欲・態度	生活を 創意工夫する能力	生活の技能	家庭生活についての 知識・理解
日本の伝統的な日常食である米飯に関心をもち，食事の役割を総合的に考えて食生活を大切にしようとしている。	食生活への多様な価値意識をもちながら，栄養のバランスや食品の組み合わせを考えた米飯を中心とした1食分の献立を考えたり，自分なりに工夫したりする。	いためる・ゆでる・炊くなどの調理の基礎的・基本的な技能を身に付けている。	米飯は，昔から現代にかけて食べられていることや，様々な国で主食として食べられており，食文化・伝統・調理技術と深く関わりがあることを理解している。栄養のバランスや食品の組み合わせを考えた1食分の献立の立て方について理解する。

⑤指導と評価の計画（全10時間）

時間	学習活動	評価規準・評価方法			
		家庭生活への 関心・意欲・態度	生活を創意工夫 する能力	生活の技能	家庭生活について の知識・理解
第1次 1	○伝統食である米に関心をもち，米を中心とした食生活について自分なりの考えをもつ。 ・学校給食における残食率調べや日本全体の米の消費量の資料を読み取る。 ・ご飯を中心とした食生活について，自分なりの意見もち，話し合う。	◎米を中心とした食生活に関心をもっている。 ・行動観察 ・ワークシート			○現代的な食生活の課題について理解している。 ・ワークシート
第2次 2	○現代の炊飯の調理の文化的な特徴について関心をもち。 ・今と昔の米の比較をする。 ・粳から焼き米を作る，古代米ゆでるなどの調理を通して，調理方法の違い，品種の違い，調理道具の違いや発達を知る。	○日本の伝統的な日常食である米飯を中心とした伝統的食文化，調理方法に関心をもっている。 ・行動観察 ・ワークシート			◎米飯は，我が国だけでなく様々な国で主食として食べられており，その国の食文化・伝統・調理技術と深く関わりがあることを理解している。 ・行動観察 ・ワークシート
3	○国産の米の特徴やそれを中心とした食文化，マナーについて関心をもち。 ・タイ米と国産米の比較をする。米を中心とした献立やマナーの比較し，話し合う。				
4 5	○日本の伝統食に関心をもち。ちらし寿司の調理の手順を理解し，基礎的・基本的な調理をすることができる。 ・ちらし寿司の調理実習を行う。 ・伝統食に込められた知恵や願いを知る。			◎炊飯や目的に応じて切ったりゆでたりいためたりできる。 ・行動観察	○調理の手順を理解できる。 ・行動観察
6	○現代には，米の多様な食べ方があることを理解し，その課題などに関心をもち。 ・米粉の利用の仕方などを調べる。米粉を用いた調理（チヂミ）を行い試食する。			○目的に応じて簡単な調理ができる。 ・行動観察	*ペーパーテスト
第3次 7	○1食分の食事のとり方，3つのグループの食品のそろった1食分の献立の立て方について知る。 ・ごはんのみそ汁を中心とした栄養バランスのよい1食分の献立を立て，評価する。			◎ごはんのみそ汁を中心とした栄養のバランスのよい1食分の献立の立てることができる。	○栄養のバランスや食品の組み合わせを考えた1食分の献立の立て方について理解している。

			・ワークシート	・ワークシート
8 ・ 9 ・ 10	○これからのごはんを中心とした食生活のあり方について自分なりの考えをもち、1食分の献立を考えることができる。 ・毎日ごはんを食べている生活者として、自分なりの考えをもって提案したい「子どものためのごはんメニュー」を考える。 ・ごはんに合う料理や米を使った料理の調理の方法を調べ、献立をカードにまとめる。 ・できた献立を説明し、提案する。評価する。	○日本の伝統的な日常食である米飯に関する心をもち、食事の役割を総合的に考えて食生活を大切にしようとしている。 ・行動観察	◎題材を通して学んだり、調べたことを活用して、1食分の献立をについて考えたり、自分なりに工夫したりしている。 ・ワークシート	

情を育む授業づくりを行った。

ESDを教科で実践する場合、教科の目標を達成しつつ、ESDで求められる力の育成も目指すという難しさもある。しかし、家庭科の場合は、問題解決的、体験的・実践的な学びを重視する視点はESDの学び方と親和性があり、ESDの基本的な視点を授業づくりに取り入れることは、家庭科、ESDの学びの両者を充実させていくことにつながっていくという成果の一端を示すことができた。

また、家庭科におけるESDの授業実践にあたって、授業者はどのような視点で授業づくりを行い、教材開発を行うとよいのか追究する機会を得て、2年間を通じた継続性や総合的な学習との連携を重視した授業実践を示すことができた。

課題として、「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」として批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度などが示されているが<sup>11)</sup>、このような能力・態度について、他教科とも連携しつつ意図的に育成することを目指したり、このような視点で評価を行ったりすることもまた、ESDの視点を取り入れた授業改善には必要である。そのような先行研究に学びながら更に研究を進めていきたい。

## 引用（参考）文献

- 1) 阿部治『持続可能な社会の構築総合調査報告書1 今なぜ「持続可能な社会」なのか』国立国会図書館調査及び立法考査局
- 2) 武藤八重子『食物の授業』p.141 家政教育社(1989)
- 3) 2) 同書p.179
- 4) 2) 同書p.179
- 5) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(平成20年1月)
- 6) 2) 同書p.183
- 7) 文部科学省ホームページより  
<http://www.mext.go.jp/unesco/004/004.htm>
- 8) 曾我 幸代『「価値中心」のESDの実践にむけたシューマッハー・カレッジからの示唆』国立教育政策研究所紀要 第140集(平成23年3月)
- 9) ESD-Jホームページより  
<http://www.esd-j.org/>
- 10) 山西優二『持続可能な教育と文化』p.148 日本ホリスティック教育協会 永田佳之 吉田敦彦 編 せせらぎ出版(2008)
- 11) 『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究の最終報告書』国立教育政策研究所(2012年04月)